

島崎藤村・作 幸福 より抜粋

「幸福」がいろいろな家へ訪ねて行きました。

誰でも幸福の欲しくない人はありませんから、どこの家を訪ねましても、みんな大喜びで迎えてくれるにちがいありません。けれども、それでは人の心がよく分りません。そこで「幸福」は貧しい貧しい乞食のような服装をしました。誰か聞いたら、自分は「幸福」だと言わずに「貧乏」だと言うつもりでした。そんな貧しい服装をしても、それでも自分をよく迎えてくれる人がありましたら、その人のところへ幸福を分けて置いて来るつもりでした。

この「幸福」がいろいろな家へ訪ねて行きますと、犬の飼ってある家がありました。その家の前へ行つて「幸福」が立ちました。

その家の人は「幸福」が来たとは知りませんから、貧しい貧しい乞食のようなものが家

の前にいるのを見て、

「お前さんは誰ですか。」

と尋ねました。

「わたしは「貧乏」でございます。」

「ああ、「貧乏」か。「貧乏」は吾家じゃお断りだ。」

とその家の人は戸をぴしゃんとしめてしまいました。おまけに、その家に飼ってある犬がおそろしい声で追いついて鳴きました。

「幸福」は早速ごめんを蒙りまして、今度は鶏の飼ってある家の前へ行つて立ちました。

その家の人も「幸福」が来たとは知らなかったと見えて、いやなものでも家の前に立つたように顔をしかめて、

「お前さんは誰ですか。」

と尋ねました。

「わたしは「貧乏」でございます。」

「ああ、「貧乏」か、「貧乏」は吾家じゃ沢山だ。」

とそこの家の人は深い溜息をつきました。それから飼ってある鶏に気をつけました。貧しい貧しい乞食のようなものが来て鶏を盗んで行きはしないかと思ったのでしよう。

「コッ、コッ、コッ、コッ。」

とそこの家の鶏は用心深い声を出して鳴きました。

「幸福」はまたそこの家でもごめんを蒙りまして、今度は兎の飼ってある家の前へ行っ立ちました。

「お前さんは誰ですか。」

「わたしは「貧乏」でございます。」

「ああ、「貧乏」か。」

と言いましたが、その家の人が出て見ると、貧しい貧しい乞食のようなものが表に立っていました。その家の人も「幸福」が来たとは知らないようでしたが、なさけというものがあると見えて、台所の方からおむすびを一つ握って来て、

「さあ、これをおあがり。」

と言ってくれました。その家の人には、黄色い沢庵のおこうこまでそのおむすびに添えてくれました。

「グウ、グウ、グウ、グウ。」

と兎は高いいびきをかいて、さも楽しそうに昼寝をしていました。

「幸福」にはその家の人の心がよく分かりました。おむすび一つ、沢庵一切にも、人の心の奥は知れるものです。それをうれしく思いまして、その兎の飼ってある家へ幸福を分けて置

いて来ました。

1997年10月16日公開

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さまの協力に感謝します。